

～アシカ母子が見せた 感動シーン～

小 松 守

(秋田市大森山動物園～あきぎんオモリンの森～名誉園長)



アシカは千秋公園にあった児童動物園時代から、代替わりしながらも飼育を続けてきた大森山動物園の人気動物の一種だ。運動能力や知能の高さから、水族館などでは様々なショーを見せてくれるお馴染みの動物でもある。

直接の獣医療等が難しいアシカ健康維持のため、ずっと以前から人と関わるトレーニングを続けてきた。熱心な飼育員がアシカの鼻先(髭)の器用さを活かし、竿燈まつりの頃には飾り用ミニサイズ竿燈をアシカに上げさせていた時もあった。

分類学上ではライオンやオオカミなどと同じ食肉目の仲間で、英名表記では“Sea Lion”だ。そう話すと多くの人は意外に思う。さらにライオンなどネコの系統ではなく、イタチの仲間に近い動物と伝えられると、なるほどカワウソにも似ているねとうなずく。進化の早い段階で水に入り、魚食性に特化したアシカの歯は、食肉目の特徴でもある大きな犬歯や鋭い奥歯(裂肉歯)を発達させず、魚の歯に似る。食への適応は動物の姿を変えて来たのだ。

アシカに似ている水生動物にクジラがいるが、クジラ類は完全海洋生活のため出産や子育ても海中だが、陸生活を残すアシカは出産や子育てを陸上で行う。いのちをつなぐ大事な営みの場が陸上なのは、そこが生きる上の基盤だとも言える。

前置きが長くなったが、今回の思い出は30年程前にアシカが見せてくれた、いのちをつなぐ感動的なシーンである。

園が初めてアシカの繁殖に関わった時のこと、

当時は大いに不安であった。様々情報を集めてみると、注意すべきことの一つに出産後の子の水に関連する事故があった。改めて園のアシカ飼育の環境を見てみると、出産のための陸地面積は狭く、さらに母子が安心できるように雄を分けた飼育も必要で、母子の居場所がさらに狭くなった。また、陸地とプールの水面との落差も大きく落下による事故はやはり心配だった。子の水に関連する事故だけは防ごうと水位調整なども工夫した。

初めての経験で私たちも緊張した。母アシカもお産が近づくとつれ、どこか落ち着きがなさそう心配だったが、出産は無事に済み心配は杞憂に終わった。母アシカの子へのやさしい口付け、お腹を横にして見せる授乳ポーズ、子はやさしく接してくれる母に引かれお乳をまさぐり飲む。アシカの母と子に関わり合う姿は実に微笑ましく、美しくもあった。母と子の双方が見せた何の変哲もない絆を結び合うプロセスとその時間は、後述する母と子の感動的なシーンの始まりでもあった。

母の傍で安心して過ごす子は、たっぷりのお乳をもらううちに余裕も出てきた。そしてしきりに母から離れるそぶりを見せるようになった。そのたびに母アシカは「危ないから離れちゃダメ!」と、「アォ」「ブフッ」と声を発して子を制し、前ヒレで子を手繰り寄せ、時には口でくわえ、目の前に引き戻すという行動を神経質なくらいに繰り返した。母アシカが見せた態度は子を守ろうとする自然なものであり、まるで人の幼児がお母さんの手を振りほどきサッと飛

び出した時に、お母さんが「危ない」と追いかける姿にそっくりだった。

濃いお乳で育つアシカの子は成長が早く、生まれて数日もすると、子はますます母の傍を離れたがるような様子を見せるようになった。子どもの成長に伴う自然な変化であると同時に、海で生活する母アシカ自身も早くに海に出て食事をとらねばならないから、子の早い成長は理にかなったものとも言える。子の動きは日に日に力強くなり、すぐ傍の水にも関心を示すようになっていた。母アシカは自分から隙あらば離れようとする子を心配して気が気ではなかったが、一方でどこか複雑な思いも抱いていたのかもしれない。

アシカ母子の密着型の子育てを見ながら、母と子の水をめぐる自然の仕掛けにどこか巧妙さというか不思議なものを感じていた。水中を自由に泳ぎ回る母アシカは、子が水と関わることをどう意識していたのだろうか。また、母アシカ自身は子どもの時に初めて水に入った体験をどう記憶し、あるいは身体にしみ込ませていたのか。一般的に哺乳動物の母は子を危険なことから守ろうとする母性が働く。それはアシカでも同じだろうが、アシカの母には子と水の関係に特別な感覚があるのだろうか。母アシカは子が目の前から離れると危ないと思っていたのは間違いないが、水に対して他の動物とは違う感覚があったのか、単に傍に置きたかったのか。

アシカの母子が見せた感動的シーンは突然繰り広げられた。今でも鮮明に蘇ってくる。その日も母アシカは、いつものように水辺から少し離れた所で目の前の子を見守っていた。私の目にはそうとしか映らなかった。

しかし、そうした母子の光景は何の前触れもなく一変した。子は何の迷いも見せずに母の目の前からスルスルと離れ、そのまま一気に水に入ったのだ。一瞬のことだった。それに呼応した母アシカの動きも実にスムーズだった。今までと全く違い、子の動きを制する仕草を微塵も

見せなかった。子が「ボク、行くからね」と言い、母が「じゃ、気を付けるんだよ」とでも応じたような、まるで母子の会話が既に交わされていたかのようなようだった。

感動的なシーンはすぐに繰り広げられた。子がプールの水に入るや否や、母は間髪入れずに子の後を追った。波も立てずにスッと水に入り潜水して、泳ぐ子の下で伴走ならぬ伴泳したのだった。その意味はすぐに分かった。子は勢い良く水に入ったまでは良かったが、息継ぎがうまくできず、すぐに「アップ、アップ」と慌てた様子を見せ始めたのだった。母アシカは子アシカが溺れそうになることを知っていたかのように、なんと子の下を泳ぎながら、自分の背で子を押上げてあげたのであった。

どんな動物の母にも子を守り養護する性質、母性が備わっている。だから子が育つ。目の前に子を襲う物があれば追い払うし、危険な目にあわぬように巣の中に隠しもする。母アシカは子が溺れそうになることを予知していたに違いないと私は思った。泳ぎを手助けした母アシカが見せた行動に驚かされたと同時に、大きな感動を覚えた瞬間だった。母性、愛育とは何なのかを頭をよぎった瞬間でもあった。

その一方で不思議に思ったことがある。子が水に入るタイミングを母アシカがなぜ知っていたのかだ。私は考えた。アシカの母子が紡いだ関係性、絆の中には人には感じられない情（こころ）の交流があったのだろうと。また、母アシカが後追いで水中に入り、子を支えた行動がどう発現し、なぜできたのかも実に不思議に思えた。母アシカ自身が子どもの時に初めて入水した時、自分の母に同じように助けてもらった経験があったからできたのだろうと考えている。愛された経験が子に引き継がれる「愛のリレー」があったから、アシカは生き続けて来たのだろうと思う。それは同じ自然物の人にも通底しているはずだ。